

---

# 私と先輩と、バスケと恋。

由紀琳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私と先輩と、バスケと恋。

### 【Zコード】

Z0709Z

### 【作者名】

由紀琳

### 【あらすじ】

館華亜緒たかはなあおは容姿端麗で大人しい性格のいい子。…というのは外面で、本当の性格は女の子らしくない性格の悪い子。そんな亜緒がある日一ノ瀬良こなのせりょうと出会い…

## 登場人物（前書き）

よろしくお願ひします！！

## 登場人物

・ 館 華 たちばな あお  
亞緒

女 9月9日生 おとめ座 16歳 特技 猫かぶり 趣味 人間觀察 身長165cm 体重48kg

普通より少し貧しい家庭。中学の時にいろいろあり、猫をかぶつて大人しい性格で学校生活を送る。本当の性格はキツイ。趣味の人間觀察をしながら、心の中では毒舌吐きまくり。でも優しい所もある。女子のくせに相当な面倒くさがりや。成績はまあまあいい方。だと自分で思つてゐるだけで、本当は5位以内に入るほど。

艶やかな黒髪で、胸の辺りまでの長さ。小顔で二重のパッチリした目。口は小さく、口角は少し下がり気味。化粧はしない。細身で足が長め。モデル体型に近い。「容姿端麗でいい子」と言われ、男女共からモテている。無自覚。素顔の時は自分のことを「うち」と呼ぶ。猫をかぶつてゐる時は「私」。

・ 柏原 真 かしわばら まこと

男 10月5日生 天秤座 16歳 特技 野球 趣味 読書 身長179cm 体重65kg

普通の家庭。中学時代は野球部だった。亞緒と同中出身のため、本当の性格を知つていて。性格はサバサバしていて、何事もあまり気にしない。亞緒の性格が変わつたのもあまり気にしていない。クラスには普通に馴染んでいる。成績は普通。

校則が結構自由で、髪は暗めの茶色、アシンメトリー。左分け。一重のくせに目が大きい。野球部だったこともあり、筋肉質で少しだけがつちりしてゐる。特に好かれるワケでもなく、嫌われるワケでもない普通のヤツ。亞緒に何かと絡まれ、絡む。

・一ノ瀬 良

男 5月20日生 おうし座 17歳 特技 バスケ 趣味 スポーツ観戦 身長185cm 体重64kg

普通より少し上の家庭。小学生の時からバスケをやつっていて、才能に溢れている。今もバスケ部に所属していて、次期部長と噂されている。リーダーシップがあり、爽やかな性格。気配りができ、ユーモアがあり、優しい、という良いヤツで、運動神経抜群というカッペキな人間なため、ものすごくモテる。モッテモテ。少し自覚しているが、特に気にするわけでもない。

明るめの茶髪で、右分け。シャープなあごのライン。二重で目が大きい。唇は薄い。手足が長く、体中に筋肉がついているが、細マッチョ。あることをきっかけに、亜緒にまとわりつく。

・山田 蘭子

女 16歳 特技 情報集め 趣味 妄想 身長153cm 体重45kg

良のことが大好きな追っかけ。束縛がものすごい。ミーハー。でも、良一筋。自分を可愛いと思っているナルシ。でも、それほど可愛くない。女扱いをあまりされない。

腰まである長い髪。良のマネで明るめの茶髪。少し丸顔。一重で目は小さめ。華奢だが少し重め。

## 登場人物（後書き）

感想などよかつたら書いてもらえると嬉しいです（、 、 ）

## この本の活用（前書き）

前回のサブタイトル間違えました！

すこません（・・・・・A）アセアセア

## こつもの生活

館華亞緒。高校1年生、16歳。

家庭は結構複雑だと思つ。少なくとも幸せではない。  
貧乏だし、親は仲悪いし、お姉ちゃんは問題児だし。つちも中学の時少し問題児だったし。

友達はない。正確には、いたけど自分からなくした。自分からね。うちなんかと関わつてもいいことないと思ったからうちから縁を切つた。「縁を切つた」と言つても大したことはしていない。ただ、連絡取れなくしただけ。

学校ではうちの本当の性格を隠している。いわゆる、猫かぶり?みんなとは近すぎず、遠すぎずの距離で接してゐる。

まあ、こんな感じの生活。あ、そつそつ。朝は結構早起き。なぜかつて?

朝シャンするからだよ。今は冬に近いから、ものすこしく寒い。そんな思いしてまで朝入る理由は… 教えないよ。

今田も朝シャンして学校に行く準備をして、出発する。

「こつてきます。」

誰もいない家の中にボソッと呴き登校する。

親は共働きで、時々朝から一人共いないときがある。それが今日だ。まあ、そんなに関係ないけど。

「おはよー」

「あ、おはよー。」

「はよっ。」

「おはよー。」

教室に入ると、みんなが挨拶をしてくる。内心めんどくせこねだい、猫かぶりモードONの今のうちが無視できるわけない。てか、思つたんだけど、「はよっ。」ってなんだし。「お」と「う」はどういつたんだよ。「はよ」なんて言葉、日本語になにし。日本人なんだから日本語正しく使えよ。つかえないなら英語でも使え。「Goo d morning.」とか言つてりやいいじゃん…！  
…おおっと、ちょっとシッ ロハ過ぎたかな？（笑）  
そんなことを思つてじる、あの日本語が正しく使えない日本人もどきがまた声を掛けて來た。

「やつぱつ今日もかわうこーねー亜緒ちゃんはー。」

「え。そんなことなによ。」

『かわうこーね』だつて。ひざひ。ひさしき嫌いなんだよね。かつこよくないし。チャラこし。

「またまた～。そんなに謙虚になんなくていいくんだよ。」

「ヤーゼー。でもまた謙虚な所が可愛いくね～」

「フフフ。みんなお世辞が上手いのね。」

ホント、お上手ね。…誰にでも言つてんだろ、そんな言葉ー・ちょー ウザイんですけど。もう、ビックリ行つてくれないかな。  
そつ思つていると、

「おはよー。」

と「カイ体したヤツ」が入つて來た。…柏原真かじわらまことだ。

「おはよー。」

と笑顔で「ひが」が返すと、見逃してしまつくらい一瞬だけ、「ヤツ」と笑つた。

…何が面白いのよ。ムカつく。

真はうちの横を通り過ぎ、みんなに挨拶をして「ひが」の後ろに座つた。

「よお。猫かぶり姫緒ちゃん。」

真は前のめりになつて小声で話して來た。  
めっちゃムカつく。でもまあ、小声で話してくれるからまだいいけど。

「何のこじ?」

うちは少し後ろを向いて知らないフリをして言つた。  
ホントは思いつきり叩きたいところだけど、「こじ」はおもえて。

「そんなことする意味がわかんねえなあ。オレは。」

だから何のことだつて言つてんじやん。お前も外国人かつ。  
答えるのもめんどくさい質問だったから、答えずに無視した。その代わり、色んな思いを込めた笑顔を返した。おもに怒り? (笑)  
その後に先生が来て授業が始まった。

お皿。

うちはいつものように誰もいない空き教室で「」飯を食べよつとした。すると、ガラガラッとドアを開けて誰かが入つて来た。

「 よお。 」

真だつた。

真はなぜかわからないけど、一週間前ぐらゐから「」いつかと一緒に飯を食べるようになつた。

教室で絡んでくるのも一週間前ぐらゐからだ。

「 また？」

「 いいじやん。 別に」

「 ヤダ」

ちょっとぐらゐ一人になりたいもん。そして午前中あつたことを思い出したりしたいし。

そんな思いを無視するよつて、

「 まあまあ、食べよづば～」

と言つてきた。

それに言つ返さうとしたとき、

グウ~~~~~

と大きなお腹の音が鳴つた。…間違いなくうちの音だ。

真は、声を出さないよつて口を閉じ、拳を作つて口に当り、肩を小刻みに揺らしている。

こんな失態を真に見せるなんて…。なんてことだ。そつ思ひと、だ

んだんと頬が熱くなつてきた。

うわあ！顔まで赤くしちゃうなんて……最悪だ。「〇（←→）〇」

こんな絵文字が当てはまつてしまひ。

出来るなら時間を戻したい。そう思つてこの間にもまたお腹が鳴つてしまつた。

「ハラ、めつりや空にてるみたいだから早く食おひせへ。」

うう～。めつりや悔しい……こつか仕返しつづかる…覚悟してから、  
真！――！

そしてついでに飯を、やけ食い状態で食べた。

これがつらのこつもの生活。

## こつもの生活（後書き）

感想などよろしくお願いしますーー！

## **先輩との玉露会（前書き）**

ついで先輩と玉露会ひかけます（#^・^#）

今日もいつもの様な生活だと思っていた。

つまんないな、なんて一瞬でも思った自分がいて、自己嫌悪してしまった。

自分からこの人生を選んだんだから、こんなこと思っちゃいけない。それに、真もいるから大丈夫か。またお昼一緒なのかな。

…って！また変なこと考えちゃった！ダメダメ。何やつてんだ、うち。よし、今日もがんばるぞ！

そんなことを思いながら、学校へ行つた。

学校に着いてからは、猫をかぶつた。今日もある日本人もどきが声を掛けてきて、「かわういいーね！」って言つてきた。マジうさ。本当なら関わりたくない。でも、しちゃがない。  
そう自分に言い聞かせるしかない。

お昼もまた真が来て、一緒にご飯を食べた。

今日は羽目を外すことはなかった。…よし！  
心の中でガツツポーズをしたくらい嬉しかった。

今日は日直の日だった。

日直は一人で、うちともう一人の人は日本人もどきの友達だった。面倒だな、と思つたけどこっちの人はそんなにうるさくなかった。むしろ、優しくていい人だと思つたくらいだった。

そして最後は日誌を先生に渡すだけになつたので、あまり役に立たなかつたお詫びとして、うちが渡しに行くことにした。

先生を探すと、職員室にいた。

コンコン、と扉をノックして「失礼します。」と言つて入る。

先生の席まで行き、日誌を渡して帰らうとするが、

「あ、館華。ちょっと頼まれてくんない？」

と言つてきた。

めんどくさい。なんでよりこよつてうちなの? もつと違うヤツに頼めよ。

でもまあ、断る理由もないし今はいい子だからやるしかないが。

「なんでしょう?」

心のつぶやきとは大違ひの言葉遣いで聞く。  
さつと終わらせて帰る。

「あのや、体育館からサッカーボール取つて来てくれない? 一つだけ泥めつちや付いてあるのあると思つから。」

そして、顔の前で両手のひらをくつつけて、「お願ひ」と付け足した。

嫌です、なんて言えないから、しょうがなく

「分かりました。持ってきます。」

と笑顔で答えた。

： 分かるわけないだろ！ そんなの自分でやれし。 それかマネージャーに頼めばいいじゃん！！

マジ意味わかんない。 あームカつく。だから先生って嫌い。ウザイし生徒のことこき使つて、偉そうなフリするし。マジありえない！！！

そんなことを心の中で、あくまでも心の中でつぶやきながら体育館へ向かった。

体育館に入ると人は一人もいなかつた。

そういうえば今日は体育館使う部は、全部休みだつたな。なんでだつたかな？

まあそんなことどうでもいいや。早く帰りたいし。  
帰つたら何しようかな。パソコンでもやるうかな？ それとも録画しておいたテレビでも見ようかな？

： つてそんなのは後で考えればいいか。  
まずはサッカーボールだよ。倉庫かな？…

「ロロロロロ、トン

： 足に何かがぶつかって、それを確認すると…うわ。バスケットボールじゃん。懐かしー。

なんで懐かしいかって？ それはね、うちちは昔バスケをやっていたからさー！

： こきなじこの口調は変だつて？ ん一分かつた。 やめるよ。 しう

がないなあ。

まあそれは置いといて。さつき言ひた通り、つちは小学生から中学生までバスケをやっていた。それも今は、勉強に集中したいからやつてない。

でも一番の要因は……才能がないから。元々運動神経悪かつたし、全然上手くなかったから、小・中学校とは違つて高校はもっとキツイから、うちにには無理だと思つた。

てかそれ以上に、猫かぶつた時の性格と全然違つから出来ないつしょ（笑）

……でも、ちょっと氣になる。中3の春から全然ボール触つてないし。それに、足元に転がってきたヤツ拾わないで無視するなんて、ねえ。と、最もらじい言い訳をつけてボールに少し触れた。

うわー。ちゅー懐かしー。このザラザラした感触。独特の匂い。なんかドリブルしたくなつてきた。…誰もいよいよね。えーい、ドリブルしちゃえ～！

そして立ち止まつたまま、ドリブルをし始めた。

ハハハ、楽しくなつてきた。ヤバイ！めりちゃや樂しー。走っちゃえ！「ワー！…ヤバーイ！  
ホント樂しー。ショートもしちゃえ！

えい、と投げるとポンッと氣持ちいい音が聞こえた。

おお。入つたあー。もう一回ショートしちゃえ～。うわー、また入つた！ハハハハ…

## ガラガラッ

「…?」

音がした方を勢い良く見ると、バスケ部の部室から扉を開けてうちに見ている人がいた。

理解するのには少し時間が掛かった。

…ん？人？人！？ヤバイ！…見られた！…どうしよ…

「どうしたの？何してんの？」

「え？」

どうしたの？…え？ちょっと、意味わかんないんですけど。  
あ！ボーッとしてる場合じゃなかつた！！  
どうすっぺ。…そうだ！」は、「逃げるが勝ち」だ！…これしかな  
い！一応なんか言つとこつ。

「すいません！」

咄嗟に頭に浮かんだ言葉を口に出し、急いで倉庫へと向かつた。

ボールボールボール…あつた！つわ汚つ。でもしょつがない。逃げ

る！

そしてうちは全力疾走した。

途中でさつきの人、「あ、あのー」と呼んだ。

…気がしただけだよね。そうそつ。うち、決して無視なんかしてないよ？ほんとにしてないよ？

ただ、呼ばれたかどうか不確かだつたからね、もし呼んでなかつたらうち恥ずかしい人でしょ？

だから、振り向かなかつたんだよ。そう。そつだよ？

：ハア、ハア、ハア：

息切れヤバー。やっぱ運動不足かな？

あ、そうだ。ボール先生に渡さないと。

そして手の中にあるボールを見て、やっぱり汚いなー、なんて思ひながら先生に渡して帰路についた。

まず、頭を整理しよう。

さつきうちのことを見ていたのはあの人だけだつたよね。

あの人、何て名前だつたかな？

「そついえばあー、あのバスケ部の一ノ瀬良先輩いちのせりょうつてえー、ちょー  
カッコイイよねえー。」

：一ノ瀬良？一ノ瀬、バスケ部：！：

一ノ瀬良先輩だ！そうだ、一ノ瀬先輩！

顔は申し分ないくらい…いや、申し分なんて一切ない良い顔してた。  
ムカつくな。

：で、明日言いふらされてたらどうしよう？…そんなことされたら、今までのうちの努力が無駄に…！  
それだけはヤダ！！ムリ！！

どうしよう。なんか良い策ないかな？

：ああ、もう！なんでこんなことになるの…？…元はといえば自分

の不注意のせいなんだけれど。

でも、そんなこと今更言つてもしょうがない。

マジで思ひがけない

う

…これが先輩との出会いだった。

## 先輩との会話（後書き）

こんな感じです（笑）

いやー、虫歯は口が悪いですねー（ 、 \* ）（ ）ケラケラ

## I | 魔女の王女こ（繪書）

第4話です！

楽しんでいただけたら幸こです（・・・）

## 一度の出会い

先輩と出会った次の日。

うちはいつものように朝シャンをした。浴び終わって、朝ごはんを食べながら悩んでいた。

学校に行くか行かないか。

行きたくないといえば行きたくない。でも休むと授業に追いつけなくなる。

自分の名誉を優先させるか、授業を優先させるか。

……うーん。どうしよう。悩む……

やつぱり、学校に行くしかないか。いくらバラされてて周りと気まずくても、授業が受けられないわけじゃないし。それに将来、職に就くためには学歴あるのみ。

よし、学校行こう！

家を出る前に、自分の両手でほっぺたをパンツと引き、気合を入れて出発した。

学校に着き、教室に入る。そして、バラされていないかとドキドキしながら中に入っている人に

「おはよう。」

と声を声をかけると

「あ、おはよー」

「おはよー」

と普段と変わらない陽気な挨拶が返ってきた。

「あれ？ も、もしかして、バラされてない？ ……だよね？ 普通バレてたら、詰め寄って来たり、もしくは無視されるとか、コソコソされるとか。 あるよね？ それがないつてことは、大丈夫なの？」

などと考えていると、突然後頭部を誰かにベシッとはたかれた。

「いたつ」

「突っ立てんのが悪い。何してんの？ 邪魔だよ」

犯人は、真だつた。それでもまだ動かないうちの背中を、強引に押して進み出した。

「わ、わわつ」

「まつたぐ。邪魔だつて言つてんのこ」

そして真はくすくすと笑い出した。

うちは真に押されたまま、自分の席まで来てしまった。

それが何だか恥ずかしくて、俯いたまま自分の席に座った。

「何かあつたのか？」

「え？」

真は唐突にそう聞いてきた。

コイツは何でもおみとおしなのかつ。  
でも昨日のことは言つていいのか…。 わかんないや。  
まあ、言わなことにしてしよう。

「別に何にもないよ。」

「ホントか？」

真はしかめつ面をして聞いてきたから、つむりは笑顔で答えた。

「本当だよ。」

すると、納得がいかないような顔をしながらも

「ふーん。」

と言つた。

別にそんな顔しなくとも。  
てか、何でうちのことなんか気にすんのかな。わけわからん。  
どうでもいいか。とにかく、バレないようにしてよう。

次の授業は移動教室だつた。うちはそのことを忘れていて、のんびりとトイレに行つていた。

それから教室に戻ると、誰もいなかつた。ものすごく焦つた。  
そして急いで準備をし、廊下を走つていると、

ドンヂ

と誰かにぶつかってしまった。

「すいません。」

うちばぶつかつた拍子に落ちてしまつた教科書などを拾いながら言  
うと、

「ニヤ、リハチャルアーティストとして……」

とその人が言い、一緒に拾つてくれた。

.....  
.....  
.....

あ、あうかとうじやうこせん

拾つてもらつたノートを受け取ろうとして、顔を上げて見たものは  
一ノ瀬先輩だつた。

や、ヤバイ！これはヤバイ……これは、あれだ。逃げるしかない。

「あ、あの、急いでるので…！」

「えつへちゅうひとーー。」

「すいませんーー。」

そして、うちは走り去った。走りながらひねり回った。

あ～マジで今のはヤバイ。ヤバイ。でも、じょうがないな。うん。しようがない。

そういう。知らない。知らないことにしよう。そういうーー。

これが、うかと先輩の一度目の出会い。

## 一 度田の田舎ご（後書き）

びりだしたでしょつか。

これからもがんばりたいと思つます。

## **先輩とのマヤな約束（前書き）**

少し長めへ。です。

是非読んでくださいこ(\*・・\*)\*-\_-

## 先輩とのイヤな約束

あれからひはブルーな気持ちでいっぱいだった。  
授業の内容も何も入ってこない。

はあ～。どうしよう。また会つたりしたら最悪なんだけど。  
チョーサイアク。会わないことを願うしかない。  
いるかわかないけど、いや、多分いなと思つ神様。  
お願ひします。うちと先輩を会わせないでください……そして頭の  
中で手を合わせた。

「… むん。館華さん。聞いてる？ おーい」

全然気づかなかつたが、誰かに呼ばれていたみたいだ。

「…えつ？ あ、『めん！ 聞いてなかつた。… もう一回言つてくれる  
？』

「いいけど。どうしたの？ いつも真面目に授業受けているのに」

「そ、そうかな。」

「うん。まあいいや。あのね、ここを……」

「うん。うん。……」

ダメだ。昨日からあの先輩のこと考えて何も出来てない。

一回忘れよう。そうしないともたない。ひの頭がイヤのようパンクしてしまひ。

それからひは授業に超集中した。

授業が終わり、昼休みに入った。  
うちは疲れきつてしまい、廊下をダラダラと歩いた。

はあ～。

…なんかため息ついてばっかりじゃね？ひひ。「んなんじゅ幸せ逃げてくよ。

待つて、幸せひへへん！！私を不幸にしないでえへへへ..

…ハハハ。キャラ崩壊してきちゃった。テヘ（ノヽヽ）

…うわ。キモチワルッ。ついついカタコトになっちゃったよ。外人  
かつ。

…自分で自分をツッコんじゃったよ。（。三。・）アレマッ！

ホントにおかしくなってきた…。ヤバイ。うちじこまでどんだけボ  
ケてきた？

もう可哀想な人じやね？どうじょづ。

…あれもこれもある一ノ瀬先輩のせいだ。（まあ、あれもこれもつ  
て程じやないと思つけど）

なんて思つてると、

「あー…やつと見つけた！探したんだよ。」

「……」

と前から何かを言いながら近づいて来る人が見えた。

何言つてんのあの人。独り言？カワイイソー。

「おーい！」

そう言つてその人は手を振つた。

「誰だよ。早く行つてやれよ。あの可哀想な人になつてるから。

と思つて後ろを見てみると……誰もいなかつた。

あのー。もしかして……うち？

……ま、まつさかあー。うちなわけ……ってあれ誰？

田を一生懸命凝らしてみると、そこには……一ノ瀬先輩だった。

あ。一ノ瀬先輩じゃん。遠目で見てもカッコイイんだなあ、あの人  
は。

……ん？イチノセヤンパイ？

え？い、い、い、一ノ瀬先輩！？

こっちは向かつて来る！？え、えへへへへ！？来ないでえへへへへ

へへへ..

そんなうちの思いとは裏腹に、先輩は笑顔で小走りをして來た。  
ヤバイー！やつぱりここは逃げるべき？いや、そんな悩んでいる時間  
はない！

時間は刻々と迫っているんだぞ！亞緒、何がなんでも逃げる！

そして全速力で走った。

後ろが気になり、チラッと振り向くと、

うわーー！追つて来てるよ！

「どうして？ あーそつちね…」

は？何言つてんの、あの人。そつちに何があんのよ。

後ろを向いていたからはその言葉で前を向いた。

だつた。

う、うわあ～！ぶつかる～～～！…

うちは急いで自分の足に急ブレーキをかけたが…遅かった。必死の  
急ブレーキも叶わず、うちは田の前の壁に、

ドンッ！！

と鈍い音を立てて勢い良く頭をぶつけた。

「いたたた……」

そのままつむは後ろに転がり、教科書やら何やらをぶちまけて頭をさすった。

マジで痛い。今世紀最大の痛さじゃないだろ？ 絶対たんこぶ出来るよ。

恥ずかしすぎるよ、ソレ。しかもこんなとこシップ貼れないし。貼つてたらそれまた恥ずいし。

「…大丈夫？ うわあ、痛そ。」

「……」

…忘れてた。完全に忘れてた。この人の存在。

うちはしゃがんだ先輩を呆然と見た。

何この人。いつ見てもカツコイイじゃん。マジムカツく。

「そんなに後ろ見て走るからだよ。…とか、なんで逃げるの？」

うちはまだボーッと先輩を見ていた。

うち、何も言つてないよね？ 一言も発してないよね？

それなのに喋るんだ。疑問まで投げかけちゃうんだ。ある意味すごいね。

「…おーい。聞いてる？ おーい。

あ。もしかして頭痛い？ 保健室行く？」

そう言つて先輩が立ち上がつた。

今だ！逃げろ！

と思い、教科書などを急いで集め取り、全力疾走で逃げると…。

「うわーちょっとー」

と言つて先輩が追いかけて來た。

もー来ないでよーーしつこーーのまま逃げ去りたいーー！

そんな思いも虚しく消え去つてしまつた。

走つてから約5秒後に追いつかれ、腕を掴まれてしまつた。

その力はとても強く、痛い程がつちりと掴まれた。

最初は少し痛いと思うだけだったが、だんだんとものすくく痛くなつてきた。

…加減というものを知らないのか、この人は。  
うちは一応女の子だよ？か弱い女の子だよ？例え性格が男っぽくて  
も。

我慢出来ずに、

「い、いたい…」

と言つと、

「え？…あーー」めん…少し強かつたよね？」「めん…」

と言ひ、「私の腕を掴んでいた手をパツと離した。

少しづじやねーよ、少しづじや。しかも痛すぎて声出すの辛かったよ？  
そういうの、ちょっとほん分かってもよへね？マジ何なの？

「で、話戻したいんだけど、」

と言つた所で、丁度

キーンゴーンカーンゴーン…

とチャイムが鳴つた。

うわー最悪。お腹食べてないんだけど。授業中お腹なつたりひとつ  
んの。

「あ。チャイム、鳴つちやつたね。んーじゃあ、話の続きを放課後  
で。じゃあね。」

「…え？あ、あの…」

先輩は最後に「また後でね。」と付け足して去つて行つた。

……。え？

また会わなきやいけないの？嫌だよ、会いたくないよ。  
てか話とか大方察しがつくよ？どうせこの前の放課後の話でしょ。

『なんでバスケやつてたの？』

とかでしょ。そんな話してやるものか？。

放課後なんて先輩と会いません！！ハツ。バー力。ちょっとカッコ  
イイからって何でも出来ると思うなよ。

## 先輩とのイヤな約束（後書き）

どうでしたか？

## **先輩とのメアド交換（前書き）**

結構久しぶりですね(、・・・)

## 先輩とのメアド交換

ついに放課後を迎えてしまった。

まあ、ここは迷いなく帰るでしょ。それ[じど]で待つてればいいか  
わかんないし。

さて、帰る。みんななくなっちゃったし。  
ふー。今日も疲れたなあ。つー！

「さて、話をしようつか。館華さん？」

うおーい！！

田ー田がなんか怖いよー？そんな、2・3回会つただけの人に怖い  
田する？

いやー怖い！逃げるに逃げられないじゃんか！

そうしている間にも、先輩はついに近づいて来ていた。

「ま、座つて話そう。」「  
「は、はい……」

ちょっと、威圧感がすごすぎて語尾ちっちゃくなっちゃった。  
この人こんな怖い顔するんだ。ある意味二重人格？

そして近くの席に座つた。

「さ、いきなりだけど本題に入らせてもらひつよ。」「  
「は、はあ……」

なんて答えようかな。『たまたまボールが転がってきたから』とでも言おうかな。

「館華さん。…バスケ、好き？」

「……え？」

「え？」

予想外の質問に、思わず素つ頓狂な声が出てしまった。

それ聞いてどうすんの？『好きです』って言って『そつか』だけじゃない？

…いや。質問も質問だつたから次の答えも答えか？  
それなら答えてみる価値あるかも。

「あ、好き？です。はい」

「そつか」

…あれ？今度は予想通りの答えた。なーんだ。おもしろくない。  
で、何なのよ。好きだからなんだつていうんだ。まったく。

「じゃあ、何でバスケやんないの？」

「……」

あつて間もなくうちの本性だつて知らない人にそう簡単に『才能ないからです』なんて言えるわけない。それにこんなこと他人に言う氣はサラサラない。

「ん？何でなの？」

目の威圧感の割には聞き方は優しい。変な人だ。

「いや、その。……べ、勉強に集中したいからです！」

「……ふーん。」

何その間。完全完璧疑つてゐるわー。でも、それも理由の一つだもん。嘘は言つてないもん！

「ま、いこや。ホントのこと書つ氣はないみたいだから。」

「…………」

お前はホントのひと知つてんのかよ。

「俺、これでも一応リサーチはしてきてるんだよ？」

「リサーチ？」

なんじやそりや。じつせんぼこ情報でしょ。はー、つざこつざこ。

「まず名前から。館華亜緒。9月9日生まれのおとめ座。本当の性格を隠して学校生活を送つてている。家庭は少し貧しい。極度の面倒臭がり屋。だけど困つてる人とかなんかには優しい。小・中学とバスクをやつていた。けど高校ではやつていない。頭は良い。……間違つてる所ある？あるなら訂正するけど。」

「…………」

驚くくらい当たつている。ただ、優しくないし頭良くないし。

……ん？待てよ。うちが猫かぶつてて知つてる？しかもリサーチした！？

え！？誰？その人誰！？

そしてうちは慌て始めた。

「だ、だ、誰情報ですかっ！？」

「……ブツ！…」

「うちほ勢い良く立ち上がって聞いた。すると先輩は吹き出した。

「ち、ちよつといきなり過ぎたかな？まず、座ろうつかな。

ふー。取り乱しちゃった。ここは切り替えて。

「あの、誰情報ですか？」

「切り替え速いね。館華さんの中學時代の先輩だよ。渡部先輩。」

渡部？わたべ、ワタベ、渡部……あーあ！あの人ね。確かにあの人と仲良かつたな。部活で一緒だったし。でもあの人、口軽いな。……って呑気なこと考えてる場合じゃなくて。

「そのこと、一ノ瀬先輩以外の誰かに言つてました？」

「んーと……言つてないと思つ。思い出すのにも時間掛かってたみたいだから。」

「そ、そうですか。……ならいいんだけど」

まあ、なんとなく信用出来るか。思い出すのに時間掛かっていうし。てか、話それだけかな。帰りたいんだけど。終わったよね。

「じゃあ、帰ります。それでは」

そつ立ち上がると、ガシッと腕を掴まれた。

「あ、まだ聞きたい」とありました？

「……んーん。」

先輩はそつと首を横に振った。

「え? じゃあ……」

「この手の意味は何? ビーフしていつかを呑め止めの? ……訳わからぬい。」

「……興味湧いた。」

「へ?」

「メアド、交換しよ?」

メアド交換? ..... メアド交換! ? なぜに! ? え? え? てか、興味湧いたつて何? え、ビーフしたらいの? てか、興味湧いたつて何? え、ビーフしたらいの?

「俺と交換するの……イヤ?」

「え? イヤつていうか……。その……」

ケータイなんて滅多に使わないから……昔の友達のとか全部消しちゃつたし。親とかお姉ちゃんからも滅多にメールとか来ないし。

「イヤならイヤって言つていいんだよ?」

「イヤとかそういうの? とじやなくて……」

「?」

イヤじゃないんだけど……「うちなんかが交換していいの?」

ほり、ひより可愛くて面白い子なんてこまばーいいるじゃん? そんな人気者の先輩ならすぐ見つかること思つた。その子達だって先輩

とメールしたいって思つてゐるだろ？」

それに、別にうち先輩のこと好きってわけじゃないから、好きって言つてくれる子とかと交換したほうがいいじゃん。

そういう意味で、悪いんじゃないかなって…

「うひで…いいんですか？」

「？…フッ。ますます興味が湧いてきたよ。」

そして先輩は制服のポケットからケータイを出した。その間もつりの腕を掴んでいた。

それからメアドを交換している最中、

「あの、逃げないんで離してもらえません？」

と囁つと、

「ん？ ヤダ。」

と返ってきた。

え？ 何それ。逃げないって囁つてんじやん。うわ。しかもだんだん力強くなってきてるし。

いー、痛い痛い。何？ この人無意識でやつてんの？ 曜休みもそつたし。

「よし、終わった。じゃあ今日はそろそろ帰ろつか。」

「……」

「ん？ どうしたの？ 顔、歪んでるよ。」

…誰のせいだと愚つてんだよ。ホント、冗談抜きでマジ痛い。今度

「」も声が出ない。

「つ……」

「ん？……あ、ああーーごめん！力入れすぎた！痛かったよね？」

「だ、大丈夫です。」

「ごめん。あんまりにも細かつたから……」

「……」

細いからって力入れんなよ。ちょー痛いわー、マジで。

つて、うちの腕細くないし。そりゃあ、男に比べたら細いけど。普通でしょ。

ま、いいや。帰ろ帰ろ。

「あの、今度こそ帰ります。それでは。」

「うん。じゃあ、また明日。」

「……明日……」

明日、また会うの？……会ってくれるの？

つて、何嬉しがってるの、うちーそんな、またなんて会いたくもないわ！

帰る帰るーーう、帰るーー

## **先輩とのメアド交換（後書き）**

次も頑張ります（#^.^#）

## 私の先輩のメール（前書き）

ものすごく久しぶりになってしましました！！  
すいません（・・；A）アセアセ…

今日から新学期が始まり、気を引き締めてまたちよくちよく更新していきたいと思います（\*・、\*）

私の先輩のメール

はあ。

なんか今日はまだ朝なのに溜息ばつか出るな……はあ。ほら、言つてゐそばから溜息だよ……はあ。

まったく。自分でも何考てるかわかりやあしない。

てか、まさかうちが高校入ってからメアド交換するとは思わなかつたな。

うちでいいのかつて聞いたら

でも！ そう思つたのは事実だし、あん時頭おかしくなつてたのも  
あるけど、少なくとも“うち”自身が思つたわけだし…。

またいろいろ考へちゃつてゐ~~~~~！

もへ、やめやめー。」れんがの。

学校行こ！学校！

「おはよー！」

わざわざまでの思いを心の奥深くじまい込んで、猫かぶりモードONに切り替えて教室に入り、挨拶をした。

「おはよー！」

「おはよー！」

自分の席の近くに行き、うちの後ろの席に座っている真に挨拶をした。

「なんか今日は遅いな。いつも俺より先に来てるくせに

「え？そ、そうかな？あ、あれだよ！今日は真が早かつたんじゃない？」

「そうか？まあ、いいけど。」

「そうだよ。気にしないで」

アハハハと愛想笑いをして流した。

実は図星だった。

朝、いろんなことを考えすぎて、用意が遅れてしまった。そのせいで結構ギリギリだった。

でもまあ気にする」とでもないからいいでしょう。

そして一日が始まった。

ある授業の時のことだった。

いきなり机のケータイが鳴った。

鳴ったとこ、マナーモードにしてたから制服のポケットの中でも震えた。

今までそんな経験がなかったから、最初はどうしたらいいか戸惑つた。

でも、着信の短さからメールだと気付き、じつそりとケータイを開いてみた。

From: 一ノ瀬先輩

今日俺の部活見に来て( ^ ^ )

あ、ちなみにバスケ部ね(笑)

返信ちょうだいね( ^ ^ )

とかいてあった。

…いきなりかよ。しかも今授業中だぞ。何考えてんだこの人。

でも返信って……キツイでしょう。

今の授業、運悪く小テスト中だし。先生ウロウロしている。

うん。  
…

無理だ。うん。無理。

あとにしよう。別にすぐについてかいてあるわけじゃないし。

そしてケータイを閉じてまたこつそりと制服のポケットにしまった。

誰にも見られてないよね。

てか、見れるわけがない。みんなテストに夢中だし。うんうん、セ

ーフ。

のはずだったが、実はアウトだった。

それがこれから問題になるとは知らぎ。

## 私の先輩のメール（後書き）

これからもよろしくお願いします (\*・・) \*ーー(ペコリ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0709z/>

私と先輩と、バスケと恋。

2012年1月10日20時58分発行